遊戯の報酬　梶山季之

遊戯の報酬

梶山季之

講談社

遊戯の報酬

昭和42年3月10日　第1刷発行

¥380

著　者　梶山季之（かじやま としゆき）

発行者　野間省一

印刷所　信毎書籍印刷株式会社

製本所　株式会社 若林製本工場

発行所　東京都文京区音羽2—12—21　株式会社 講談社
電話 東京 942—1111(大代表)
振替 東京 3930

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。 © T. Kajiyama 1967

遊戯の報酬

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

転落の記　5
あるヒモの告白　69
遊戯の報酬　97
流浪の人　153
とろんころん　199

装幀　伊藤憲治

転落の記

一

……弓納持節子の不幸は、彼女がミス・ジュニアに選ばれたことから始まった。

これは全世界から、十八歳未満の乙女たちが、米国のフロリダ州に集まって、その若い肢体と美貌を競うコンテストである。

各国で予選があり、その国から一名だけ代表選手が送られたのだが、彼女が日本代表となったとき、いちばん喜んだのは節子の母親であった。

節子の郷里は茨城県であるが、彼女が生れたとき、すでに父親は、東京に出て薪炭商となっていた。だから弓納持節子は、日本の予選では、関東甲信越代表として出場していたわけである。

日本代表に決まったとき、彼女はあと四ヵ月で満十八歳を迎えようとしていた。つまりミス・ジュニア・コンクールの出場者としては、年長者の方に属していたのだった。

従って節子自身、夢にも優勝しようとは考えなかったし、日本代表に選ばれて、アメリカに行けることだけで満足していた。まだ、それだけ初だったのであろう。

しかし、母親のカネは、娘が日本代表となっただけでは、不服であった。

「いいかい、節ちゃん。お母ちゃんがね、どんなことをしてでも、あんたを世界一にさせてみせるからね。いや、本当だよ。その代り、お母ちゃんの云う通りに、なんでも云うことを聞くんだよ……」

カネは節子を呼び寄せて、ある夜、そんなことを云いだしたのだった。たしか、日本代表となって、五日目ぐらいの夜のことだ。

節子は、母親の言葉にあきれた。彼女は笑って母親に云った。

「お母ちゃん。そんなこと云ったって、一体どんな方法があるの。審査員は、アメリカの大金持の社長や、有名な芸能人たちよ？　そんな人たちを、買収でもする気？」

彼女の家庭は、生れた頃より、ずっと貧しくなっていた。一般の人々が、薪や炭を使わなくなったからである。

むかし羽振りのよかった頃を、忘れかねてか父親の勘造は、

「電気コンロは停電になると使えん。ガスはよく漏れて事故を起す。その点、薪だの炭だのは、停電だの事故はないわい」

と云い張り、時流に乗り遅れたのだった。

節子も、うっすらと家の経済状態は知っていたが、彼女を高校に進学させるのが、精一杯というところだったのだ。

もしかしたら母親のカネは、ミス・ジュニア日本代表に選ばれたその夜、映画会社のスカウト達が、どっと押し寄せて来たことで、なにかを画策する気持になったのかも知れない。

少女歌手からスタートを切って、何千万円という年収を誇るようになった某女優には、母親という強力なマネージャーがついておりそのために今日の出世をみた……と云われている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

弓納持カネは、娘が日本代表となった時、そんな某女優のケースを、夢みたのではなかったろうか。

理由は、娘可愛いさからではない。

一にも二にも、金のためだった。映画女優となるにしても、日本代表という肩書と、ミス・ジュニアとでは、ぐっと契約金が違ってくるのである。

果して、どこまで節子の母親が、計算していたのかは不明であるが、かつて芝神明の不見転芸者だったカネには、夫の勘造の洋服は買わずとも、自分の着物だけはさっさと新調するようなところがあった。

娘のPTAに出席するため……というのが口実であるが、性格的に派手好きであり、こんな貧乏暮しにはあきあきした、と平気で夫や娘の前で愚痴る女でもあった。

だから云い換えるならば、弓納持節子の転落の原因は、ミス・ジュニアになったからではなく、こんな無教養で、無恥な母親をもったからだ、とも云えるのである。

……なにはともあれ、節子は渡米までは忙しかった。ラジオだの、テレビだの、或いは地方新聞のインタビューなどに追われ、また中学校や高校などの同窓生たちが歓送会をやってくれたりするからだった。それに旅行の準備もあった。

軽い中風で寝ついている父親の勘造は、カネが店を放りだして、やれ着物だ、やれ海水着だ……と一日外を飛び廻っているのを、にがにがしく横眼で眺めるばかりであった。

出発があと三、四日に迫った頃、母親のカネがニコニコしながら、節子を帝国ホテルのロビーにまで連れだし、中年の紳士と、もう一人の青年とを紹介した。

紳士の方は鏑木栄四郎と云い、さる鉄鋼会社の重役だそうで、青年はジミー・四方という二世

である。
「節ちゃん、こんどの渡米については、この鏑木さんに一方ならぬお世話になったのよ。よく、お礼を申し上げておき」
カネは、そんな風に云った。
四人で早目の夕食を摂ったが、その食事のあいだ、妙に粘っこい鏑木の視線が、自分の項や乳房のあたりに貼りつくのを、節子は感じとっていた。
ジミー・四方は、大学のころ、アメリカン・フットボールで鳴らした花形選手で、その所為か、マスコミその他に顔がひろく、鏑木の依頼で、彼女の通訳兼世話係として、同行してくれる人物だそうである。
〈あら、通訳は新聞社から、つけて呉れているのに……〉
節子はちょっとばかり疑問に思った。ミス・ジュニアの日本側の主催者は、ある新聞社の事業部だったのである。
ジミー・四方は、アメリカと日本との習慣や風俗の違いについて、あれこれと教えてくれたり、旅行のため用意する日本からの土産品は、真珠が軽くて一番よい……などと忠告してくれた。
食事のあいだ、もっぱら喋りつづけたのは二世の青年と、節子の母親の二人であった。節子は、なんとなく気詰りで、
〈一方ならぬお世話って、どんなことをして呉れたのだろう?〉
と考えつづけていた。
母親が、いつ、どこで、鏑木のような人物と知り合っていたのかも、不思議である。

毎年、暮になると、年賀状の宛名書きをさせられたが、鏑木栄四郎という名前も、鉄鋼会社も住所録にはなかった。

〈昔の、知り合いかしら？〉

節子は、母親のカネが、玄人筋の出であることは知っている。小学生だった頃、正月に一家で、ある親戚に招待されたことがあり、酒に酔ったカネが、器用に三味線を爪弾き、端唄を披露した。

節子がびっくりして、

「お母ちゃん、上手だね」

と云うと、カネは父親を指さしながら、

「そうともさ。お父ちゃんなんか、毎晩お母ちゃんを名指しで、そりゃアもう、夢中だったもんさ。ねえ、あんた……」

とノロケを云い、途端にカネは勘造から横ッ面を撲り飛ばされた。その事件があってから後、節子は母親が芸者だったことを知り、カネが暮していた世界に興味を持つようになる。

勘造が不在で、カネの機嫌のいいときを狙って、節子はときどき芸者の話をしてくれとせがんだ。彼女が中学生になった頃である。

「変な娘だねえ。お父ちゃんに、話すんじゃないよ……」

カネは娘をたしなめながらも、芸者の生活の厳しさ、愉しさなどについて、誇らし気に語ってくれた。

カネに云わせたら、器量よしでも芸ができないと芸者は駄目であり、男を騙すと俗に云われるのは、か弱い女性である芸者の、横暴な男性への反抗であって、騙された素人女たちに代わって、

復讐しているのだ……ということである。
節子は、この母親によって、歪められ美化された言葉で、花柳界というものの知識を与えられたわけだった。
弓納持節子の転落ぶりを語るには、こうした母親の影響力について、あらかじめ頭に入れておく必要があろう。
ある意味で彼女は、母親から、その美貌と淫蕩な血と、そして人生に対する考え方とを受け嗣いだ女性とも云える。
それは、彼女にとって、まことに不幸なことだった。しかし、節子自身は、それを不幸なのだと思ってもみなかった処に、悲劇は胚胎するのである。
ともあれ、弓納持節子は、ミス・ジュニア日本代表として、世界コンクール会場であるフロリダに向かうべく、羽田国際空港から旅客機に乗り込んだ。昭和三十五年二月十一日のことである。
だが彼女を送りに来た新聞社の人々も、また彼女の友人たちも、弓納持節子がこの次に戻ってくる時には、今日の数倍もの歓迎を受ける時の人になっていようとは、誰しも予想しなかった。
いや、予想していた人物が、ただ一人あったのを忘れていた。
それは弓納持カネである。
カネは、最近になって凝りはじめた、新興宗教のお題目を唱えながら、心の中で、
〈節子……云われた通りにするんだよ、そうしたら万事うまく行くんだから……〉
と叫びつづけていたに違いない。

二

節子の私設秘書として、彼女に随行したジミー・四方は、鏑木が推薦しただけあって、なかなかの顔利きであった。

それはフロリダに到着したその夜から、コンテストの審査員である人物に、つぎからつぎにと引合わせて呉れたことでもわかる。

みんな血色のいい、体格の立派なアメリカ紳士ばかりであった。いずれも晩餐会だの、夜十時ごろから始まるパーティの席上であったが、握手をかわした途端、審査員の紳士たちが、好色そうな瞳の色になるのが、なぜか気になったことである。

弓納持節子は、英語ができなかった。

洗面道具のなかに、煉歯磨が入っていないことに気づき、ジミー・四方から、コルゲートというのが米国で一番売れていると教えられた彼女は、スーパー・マーケットでその商標名だけを頼りに買い物して来たことがある。

彼女は、生れてはじめての外国で、ただ一人で買い物したことに軽い興奮と満足を味わったが、いざ歯ブラシに塗って使ってみると、口中が泡だらけになった。それは髭剃り用のクリームだったのだ……。

こんな程度の学力しかない彼女だから、ホテルの一室で、審査員たちに電話をかけているジミー・四方の英語を、たとえ立ち聴きしても、それがなんであるか理解できなかったに違いない。

ジミー・四方は、節子の母親から、ある策を授けられて、渡米していたのである。

審査発表の当日の、筆舌に尽し難い感激の一瞬が、弓納持節子の短かい生涯において、もっとも充実し、もっとも光輝を放った一瞬であったことは間違いない。

前年度のミス・ジュニアから、宝石をちりばめた王冠を頭に載せて貰い、このコンテストから一躍ハリウッド入りして大女優にのし上った女性から、真紅のガウンを着せられたとき、彼女の膝はガクガク震え、頬には感激の泪が滴り落ちていたと、当時の英字紙はその情況を伝えている。

授賞式のあと、市中パレードがあり、参加者、審査員にフロリダ市の有力者を加えての晩餐会。ひきつづいて、テレビ局のインタビューが三つもスケジュールに組み込まれ、くたくたになってホテルに戻ると、今度は日本の新聞社の特派員が、ロビーで共同会見を求めていた……。

会見を終ったあと、眠りたい一心でパジャマに着替えようとしていると、ドアのノックの音がして、出てみるとジミー・四方であった。

「いま東京が出ますよ」

四方は、早く吉報をお母さんに知らせなさいと、嬉しいことを云ってくれる。彼女は、こんどの受賞が、多分にジミー・四方の功績だと考えていたから、そんな彼の思いやりが嬉しく、思わず泪ぐんだ。

「さあ、風呂に入ってらっしゃい。電話がかかったら教えます」

湯に入ると、なんとはなしに、疲れが取れたような気持になり、少しは元気が出た。二世に奨められて、ブランデーを薄めて飲んでいると、東京が出た。

母親のカネは大喜びで、

「どう。お母ちゃんが云った通りだろ。これも鏑木さんや、ジミーさんのお蔭だから、感謝しな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com